

令和6年度(2024)活動計画自己評価の総合評価

1. 外部評価を行なった運営懇話会委員

- ・半田 昌之 (公益財団法人日本博物館協会 専務理事)
 - ・大国 正美 (神戸史学会 会長、神戸深江生活文化史料館 館長)
 - ・甲斐 史子 (姫路文学館 副館長)
 - ・坂本 竜之介 (神戸新聞社姫路本社 代表)
 - ・堤 修 (兵庫県立歴史博物館友の会 会長)
 - ・山内 敏男 (兵庫教育大学大学院 教授)
- ※ オブザーバー 服部 寛(兵庫県教育委員会文化財課長)

2. 自己評価の総括

- ・「展示」「教育普及」「博物館連携」「広報活動」「参画と協働」「管理運営」についての達成状況は良好である。
- ・「調査研究」「博学連携」についてもまずまずの達成状況である。
- ・「資料の収集・保管・活用」については、他と比較するとやや低いが、5年ベースで作業を進めている事も多い。その中で館蔵資料のオンライン公開に向けた準備がおおむね完了するなど、着実に取り組んでいる部分もある。

3. 外部評価の意見とその課題解決に向けて (●は指摘事項)

(1) 当館の事業全体についてのご意見・ご質問

①「1. 展示」

●特別展「ひょうご鉄ものがたり」の自己評価について「工夫がやや足りなかった」とあるが、具体的にどのような点なのか、改善の方向について館内で共有できているのか。 ●県内出張展示についての今後のはっきりした方向性や、それについて県内の各自治体との連携に関して、関係の構築に対する方針があるのか。	・「ひょうご鉄ものがたり」で工夫が足りなかった点とは、会場内でのクイズ等のアトラクションについてであり、当館の目標③「人と未来のかけはし」に通じるポイントである。その件は館内の会議で共有した。 ・出張展示は当館の設備改修期間中に実施したが、現在は学芸業務全般にとって過度の負担となるため、要望があった場合に限り実施することになっている。自治体との関係構築に対する方針は今後の課題である。 ・出張展示というより、具体的な展示や研究上での支援という方法もある。県立3館や当館隣接3館との連携も考える。
○兵庫県の地域性や館蔵品の特色、学芸員の専門性を生かした活動ができている。 ○限られた人員と予算のなか、業務によって取り組み方に濃淡が生じるのも致し方ない。 ●展覧会や研究活動によって得られた専門的な成果や意義、学界の反響なども自己点検に積極的に取り入れたらよいのではないか。	・展覧会について、各学会等における研究上の位置付けや、学会誌等への掲載や図録の書評なども評価の対象となり得るものであり、それらをどのような評価項目にするのか情報収集を行い、いわゆる定性評価の導入も検討していく。

○令和6年度の特別展は、兵庫の博物館として普遍性のあるテーマ設定をされていた。 ○阪神・淡路大震災がテーマの特別展は意欲的な挑戦だった。 ○特別展は入館者の満足度が高く、この満足をより多くの県民に届けられるよう努めてほしい。 ○企画展について、「モノ」「コト」を通して自己の情動を遡求させる展示ができている。 ○「阪神・淡路大震災伝える・知らせる」展では大学生や地域の方々の参画効果が感じられ、「観る側」の情動が湧き上がる体験ができた。	・「ひょうご五国のかけはし」になるという当館の使命を達成するため、兵庫県域の歴史・文化に焦点を当て、地域の魅力発見の一助となるような特別展開催を今後も行おうべきと考えている。
---	--

②「2. 教育普及」

●児童・生徒向け学習プログラムは一回当たりの参加人数が少なく、職員だけで回すのは負荷が大きい。ボランティアの協力を得るべきと考える。	・これらの事業については開始して間もないものが多く、社会への定着を図っているところである。 ・児童生徒の学習効果を高めようと、兵庫教育大学とも連携した事業もあり、参加者増に努めたい。 ・インクルーシブ対応を念頭に置いて実施するものもあり、参加者獲得に障害者団体との連携を進めている。これから育てていくべき事業であり、職員を中心に取り組み、ボランティアの助力も検討したい。
○教育普及では、児童生徒向けのもよおしや、アウトリーチ授業など専門分野を生かし活動する学芸員の姿が目に見えよう。	・学芸員等の能力を活かしつつ、講演会に偏ることなく、多様な教育普及事業の開発を目指したい。
○催しは非常に多彩で充実していると思う。多くの人が参加してほしいと願っている。 ●歴博の講座は無料であるが、他所の講座は私の知る限りでは金額の多寡はあっても有料である。	・一部講座等の聴講料有料化と、友の会会員に対しては聴講料減免について、情報収集を行っている。

③「3. 調査研究」

●研究紀要は配布範囲が限られているようであるが、デジタルでの公開とどのようなすみわけをするか。 ●高精細な画像のホームページでの公開について、当館は後発だといわざるを得ない。準備がほぼ完了したとのことで、どのような基本方針でどのようなロードマップを描いているのか。 ●「ひょうご歴史研究室」の成果の継承はどのように学芸課で管理継承されるのか。結果だけの公表にとどまらず、活用したり、取り組みの方針に生かしたりしてほしい。	・研究紀要は印刷部数が限られているため、ホームページから少しでも多くの方にご利用いただきたい。 ・高精細の画像に特化した資料画像の公開する計画は、現在のところ準備していない。現在試験運用中で、近々公開予定の当館のデジタルアーカイブでは、高精細とは限らないが、パブリックドメインで公開可能な資料の画像の点数を増やしていく計画である。 ・令和5年度末に活動を終了した「ひょうご歴史研究室」について、活動の結果得られた写真データなどの資料を学芸課で継承している。その公開・活用については、学芸課を中心に随時検討していく。 ・組織としてのひょうご歴史研究室は終わったが、ふるさとひょうごの歴史に関する資料収集や調査研究ということで、その意思は引き継がれていると思っている。今
---	---

	後のひょうご歴史研究室のポストをどう打ち出していくかについて、この会議での意見をもとに反映していきたい。
--	--

④「4. 資料の収集・保管・活用」

●(1)―2で「ひょうごライブラリー」で公開しているコンテンツ登録について、達成率が 2.5%で「どちらかといえはできた」という評価がわかりにくい。	・コンテンツ登録のためにはデジタルアーカイブが必要である。昨年度は登録こそ少なかったが、デジタルアーカイブの構築をほぼ終えることができたため、当館としてはどちらかといえはできたとの評価となっている。
--	---

⑤「5. 博物館連携」

●神戸新聞社の働きかけで 2019 年に開催した3館連携展について、今後の方向性を知りたい。	・神戸新聞社のご協力により実施した3館連携展の取り組みを今後も継続できればと考えている。昨年度には姫路市立美術館の主催事業として3館の建築を巡るツアーを実施した。参加者数こそ多くなかったが、このような取り組みを通じて、姫路城北側地域の文化的な魅力向上に努めたい。
●県立博物館3館共催の取り組みは、テーマに興味を持つ人が「巡礼したい」と思えるものであり、宣伝効果も高めるのではないかな。	・「巡礼したい」取り組みでは、県社会教育課が企画する「ミュージアム・スタンプラリー」に参加している。その他の連携の取り組みについても情報収集を進めている。

⑥「6. 博学連携」

●「参画できる」という観点から博学連携のイベントが組めると、継続的なつながりができるのではないかな。	・「『れきし博士スクール』では、イベントに興味を持った保護者が子どもを誘うケースが多かった。参加した子どもはしだいに資料に引き込まれ、最終的に子どもの着眼点が可視化される成果物を子ども自身が作る。親子の循環に加え、親から子へという形での博物館への参画もみられる点で貴重であるから、展示しているものに対して子どもがコミットしていくいろんな機会があると捉え、イベントを企画してほしい。」との意見をいただいた。博学連携イベントは学校団体の利用増を目標としている当館にとっても重要なものである。進め方や、その内容等については、兵庫教育大学との連携協定に基づき、検討の場を今後もお願いしたい。
--	---

⑦「8. 参画と協働」

●ボランティア登録された方は「博物館に貢献したい。」「ボランティアを通じて学びたい、交流したい。」等が原点だと思うので、より充実した活動を望みたい。一方で、博物館が費やす労力と、参加者に過大な負担が生じることは避けなければならない。	・ボランティア活動が、県民等にとって博物館が身近なものになると考えており、また、「人手がない状況が常態化している博物館にとって、ボランティアにどういう役割を担っていただくか、無償の労働力という間違った方向にいかないように、活動の位置づけをしっかりと決めていただきたい」という意見をいただいたので、その点を踏まえた活動の充実を図っていきたい。
--	--

⑧「使命達成のための活動計画および評価全般」

○館は使命を定め、その実現に向けた目標、活動計画を可視化し、事業に取り組んでいる。館の運営を刷新したいという意欲を感じる。 ○博物館の使命と目標を設定し、その実践のために、博物館事業の目標と行動計画を策定し、その内容と評価の結果をホームページで情報公開されている基本的な姿勢を高く評価する。 ○使命・目標の達成を目指した事業を展開している。その結果について自己点検（評価）を行い、外部評価を含めた総合評価を実施し、そのプロセスを PDCA の手法で事業の改善に反映させるシステムを、実効性を持って展開していることも評価できる。こうした現状は、ぜひ継続的、発展的に維持していただきたい。 ●現場の主体的・発展的な事業展開、課題に対する改善への努力、改善に必要な具体的対応策等について、設置者である県と運営の責任を担うマネジメント層と現場の職員が、どのような場でどのような「対話」を行っているのかが見えづらく感じる。 ○評価の仕組みが、実効性を担保しつつ事業の改善に具体的に結びつく機能の拡充を期待したい。	・博物館が社会から「必要な存在である」と受け止めていただくには、当館が社会に対し果たすべき使命を明らかにし、その使命達成のための課題、およびその達成状況の公開が必要と考える。入館者数だけではなく、博物館が取り組む様々な取り組みが県民などに評価されるべきであり、そのためにもこの評価活動は継続していかなければならない。 ・事業改善に関する設置者との関与については、主管課である県文化財課が外部評価の場に同席するとともに、評価結果を共有しながら事業の改善に供に取り組む体制になっている。また、マネジメント層と現場の職員の対話は、月例の会議において運営に係る具体的な事項について協議を行っている。
--	---

⑨「その他」

●ひょうご歴史研究室は終了したが、今後も形を変えて取り組んでいただきたい。 ●県立3館（歴博・考古・兵庫津）と連携して発信していただきたい。 ●鳴門の渦潮の世界遺産登録へ向けた、徳島県との連携は今後、歴博はどのように関わるのか。	・ひょうご歴史研究室の活動の成果は、今後の当館の活動に反映していく。 ・提示された3館に限らず、他の県立館も交えた連携を模索したい。 ・徳島県との連携については要請があれば対処する方針である。
---	---

(1) 改善に向けてのご意見・ご質問

①「1. 展示」

●満足度の指標として、図録の販売状況などの分析があればより具体的ではないか。 ●県内出張展示は、まずは連携して実施することを基本に考えることを希望する。 ●今年の秋の童謡の展示ではたつの市と連携できるのではないかと。スタンプラリーやパネル展示用の資料を県博が提供して資料展示を行うなどが可能と思うが、なにかネックがあるのか。	・図録の販売を指標にすることは、今後参考にしたい。 ・学芸員の図録や論考がどういうところに、どの程度引用されているのかなど、どれだけ社会に出ているのかは、定性評価に結びつく非常に大きな要素だとの意見をいただいた。次回評価項目を考える際に、併せて検討していく。 ・県内の各市町と連携した出張展示は意義深いと考えるものの、現有の人員のままで学芸業務に過度の負担となるのがネックとなっているため、要請があれば実施形態から検討の上対処していきたい。
---	---

●収蔵資料の目録化や展示ケース内のLED化は、優先順位としては高く位置づけられるべきであろうが、現実にはそう簡単でないことはよく理解できる。	・県では、令和6年度からの3年間で、県内施設のLED化を進めており、当館もその対象になっている。令和8年度に改修の予定がされているため、詳細については文化庁とも協議しながら、仕様について対応していく。
--	--

②「2. 教育普及」

●歴博の講座も申込時期を早めて、有料で初回のまとめ払い等の方法を検討することも一案ではないか。	・当館での講演会等の参加者は、一定のリピーターの方がいる反面、1回のみの参加の方も多し。単発での参加者は県外など遠方から来館されることもあることから、聴講料の一括払いは慎重に検討したい。
---	---

③「3. 調査研究」

●資料目録の作成作業については、他の業務を見直す（縮減する）ことで余力を捻出する決断も必要かもしれない。	・姫路文学館では、姫路市行財政改革の一環として定期的に実施される“ソフト事業の見直し”に際し、各事業の見直しを行い、わずかでも効率化を図ってきた。課題は多いが、あれこれやりすぎるとワークライフバランスや職員のモチベーション、体力面に影響が生じるため、現実的な視点を意識して持つべきだ。実施の手順など、小さな見直しも大事ではないか。 ・多言語化などはAIの精度が上がっている。現在の課題を解決する方向の1つとして、博物館におけるDX化は検討してよいだろう。 →以上のご意見をいただいたので、業務見直しの検討材料としたい。
--	--

④「6. 博学連携」

●学校では探究学習が幅広く行われるようになってきていることをふまえると、歴史博物館の活用が有効であるという認知度を高める必要がある。各学校に向けて「探究学習」に有効であることをアピールする工夫があるとよい。	・学校における探究活動との関わり方については、改めて協議をお願いしたい。ただ、活動すべてにわたって何でも受けられるわけではないため、対応可能なプランをこちらから提示する形となるだろう。そのうえでアピールの手法を検討できればと考える。
---	--

⑤「8. 参画と協働」

●例えば、1年に数度はボランティア登録者全員で多人数が必要な作業を行ってみるとか、ご検討いただければありがたい。ボランティアは博物館に貢献しているという実感を望んでいる。	・ボランティア登録者は多様な思いを持って参加されている。そのことを踏まえ、ボランティア担当理事に相談させていただきたい。
---	--

⑥「使命達成のための活動計画および評価全般」

○自己評価の項目については、妥当な設定がなされていると思われる。	
●入館者数について、達成率32%という結果を「どちらかといえばできた」と自己評価している結果には疑義を感じる。客観的に評価した上で、具体的に達成に至らなかった原因と問題点、今後の課題を分析・明確にし	・入館者数の目標は、展覧会の入館者数が多かった年度の数値により設定したものである。いただいたご意見のとおり、今後の改善策を真摯に検討すべきである。

た上で今後の改善策を検討すべきではないか。 ●逆に定性的な評価項目として、学芸員の調査研究の取り組みへの成果、館の目標に対する貢献等に関する評価項目の設定と定性的な評価指針の検討も必要ではないかと感じる。 ●広報活動を担当学芸員の業務と位置付けるのではなく、専門人材の配置等、今後に向けた具体的人的体制の姿も提示し、マネジメント層、設置者との対話の場を設ける必要があるのでは。 ○県立の中核施設として、県内の博物館への支援体制（資料の保管・保存、災害対応等に対応できる連携ネットへの支援のための中核的役割）についても、県内の他の県立施設等との連携の下で、今後に向けた積極的な検討を期待したい。	・学芸員の調査研究の取り組みへの成果、館の目標に対する貢献等についての定性的な指標についても、さまざまな情報を収集しながら研究する。 ・広報に係る専門人材の確保や人的体制の在り方については、人事の問題でもあり、本庁と連携しながら在り方を検討したい。 ・特に災害対応等に対応は、当館に事務局を置く兵庫県博物館協会において、災害時の相互協力に係る規約を策定しており対応する仕組みにより対処することになっている。県教育委員会文化財課とも相談して、秋に当館で文化財の防災のための研修をはじめとした様々な取り組みをしたいと考えている。
--	---